

ライフ・ポリティックスの時代

——ギデنزのモダニティ論をめぐって——

宮本孝二

はじめに

- 1 ライフ・ポリティックスとその背景
- 2 ギデنزのモダニティ論の展開と全体像
- 3 ライフ・ポリティックス論の発展に向けて

おわりに

はじめに

本論文の目的は、筆者がこれまで継続的にその著作を検討してきたイギリスの社会学者アンソニー・ギデنزが近年展開しているモダニティ論の概要を紹介し、その社会理論上の意義を明示し、また、その一層の発展のための方向を探ることである。その際に、彼のモダニティ論の中心的なテーマであるライフ・ポリティックスを基軸にしたい。それは1991年に刊行された『モダニティと自己アイデンティティ』の最終章のタイトルにもなっており¹⁾、現代社会における人間の生き方を問おうとする彼の問題意識をよく表現しているからである。さらに、ライフ・ポリティックス論をさらに充実させるならば、現代社会分析に大きく貢献しうると思われるからでもある。

まず第1節では『モダニティと自己アイデンティティ』に示されるモダニティ論を、ライフ・ポリティックスとその背景という観点から再構成しつつ

1) Anthony Giddens, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press, 1991.

紹介する。次に第2節では、モダニティ論をギデنزの社会理論全体、すなわちこの20年間の著作活動や構造化理論の中に位置づけることによって、ギデنزのモダニティ論の全体像と、そこにおけるライフ・ポリティックス論の中心性を明確にする。最後に第3節では、現代社会を分析する装置としてのライフ・ポリティックス論の意義を検討し、ギデنزの提示した枠組の修正を行い、さらに現実の問題としてのライフ・ポリティックスの動向について検討したい。

1 ライフ・ポリティックスとその背景

ライフ・ポリティックスのライフとは文字どおり生命であり、生活である。ポリティックスをギデنزが広い意味の政治として設定する。すなわちマクロであれミクロであれ、ある争点についての意思決定、すなわち合意形成の過程のこととする²⁾。生活ないし生命のありかたの選択が、自己と環境、自己と他者、自己と自分自身といった関係の形成方向をめぐって争点になり、それらについて何らかの問題解決案の決定が目指される社会過程が、ライフ・ポリティックスなのである。彼はそれを解放のための政治と対照的なものとして位置づける。解放政治はマルクス主義がそうであったように、資源配分の不平等の問題を争点とする。その不平等が完全に解決されたわけではないが、多数の人々が生活水準を向上させ、その前提のもとにライフスタイルを選択できるまでになったという点が重視されることになる。

彼はライフ・ポリティックスの特性を3点にまとめる³⁾。第1に、選択の自由および生成的パワー（変革能力としてのパワー）を前提に、生のありかたの選択についての政治的決定を目指すこと、第2に、グローバルな規模に拡大した相互依存のコンテクストの中で、自己実現を推進することができ、かつ道徳的に正当化しうる生活形態の創造を目指すこと、第3に、脱伝統の

2) Ibid., p. 226.

3) Ibid., p. 215.

時代であるモダニティにおいて、後述の存在問題にいかに対応するか、すなわち、いかに生きるべきかという問題を解決するにあたって必要な倫理の発展を目指すことである。これらは解放政治の特性、すなわち伝統や因習からの解放、搾取や不平等や抑圧の解消、正義と平等と参加の倫理的方向づけなどと、相互浸透しているとはいえ異質な特性なのである。

ライフ・ポリティックスの争点は、大きくわけて4つの領域に発生する⁴⁾。彼が存在問題と名づけるものがそれだ。人間存在の環境を構成する存在物、人間存在の有限性、生活の個人性と共同性、自己アイデンティティという4つの領域に、生存、超越、協同、個性という4つの道德アリーナがそれぞれ対応し、さらに内的準拠システムとしての自然、再生産（人間の）、グローバル・システム、自己と身体の4つが対応し、それぞれに実質的な道德争点が生じる。存在問題は道德的争点を生み出し、それは固有の自律的なシステムにおいて問題化されるというわけである。具体的な争点と留意すべき点は以下のようにまとめられる。

第1に存在、生存、自然という系列に生じる争点として、人間は生活において自然環境に影響を与えざるをえないが、どのような道德的責任が人間にはあるのか、また、環境倫理とは何か、という問題が提示される。ここで重要なのは人間存在の環境が自然環境に限定されている点である。

第2に有限性、超越、再生産という系列に生じる争点は、未だ生まれざる人間、ないし胎児の権利は何かという問題である。中絶問題、体外出産などの出産工学、遺伝子工学による介入の問題、無性生殖すなわちクローン人間の問題、子孫への責任の問題などがここに含まれる。自己にとって他者であるが、他者とは言い切れない存在としてそれらは位置づけられ、独立のカテゴリーを形成しているのである。

第3に生活の個人性と共同性、協同、グローバル・システムという系列に生じる争点は、自己の生活が他者に影響を与えざるをえないことにかかわる。

4) Ibid., pp. 47-55, 223-227.

ここでは科学・技術の発達をいかに規制すべきかという問題と、暴力の行使をいかに規制すべきかという問題が取り上げられる。ここでは他者の問題はグローバル化した人間社会に限定され、そこに多大な影響を与える要因として特にこの2つが示されているのである。

第4に自己アイデンティティ、個性、自己と身体という系列に生じる争点は、身体について自己はどれほど権利をもつのか、社会的・文化的性差があるとすれば、どれほど保持されるべきなのか、動物はどういう権利をもつのか、といった問題群である。ただし前の2つは、人間が自分にいかに意味づけするかにかかわる問題であるが、動物の権利の問題が人間存在の個性の問題とされることについての論拠は明確ではない。

以上がギデンズの示すライフ・ポリティックスの概要である。それでは、どのような背景の下でライフ・ポリティックスが登場してきたのか。以下では『モダニティと自己アイデンティティ』に見られるギデンズの議論の組み立てを、ライフ・ポリティックスの背景を明らかにするという観点から明示したい。『モダニティと自己アイデンティティ』は全体の要旨を述べた序章と「ハイ・モダニティの輪郭」「自己：存在論的安全」「自己の軌跡」「運命、危険および安全」「経験隔離」「自己の苦難」「ライフ・ポリティックスの登場」の7つの章からなるので、この観点から序章も参照しつつ各章の要点を簡潔にまとめることにしよう。

第1章「モダニティの輪郭」ではモダニティの制度的条件と、それが現代社会をいわば危険社会とすることが述べられる⁵⁾。モダニティの再検討が社会学的分析の前提の再考を促すものであると考えるギデンズは、ダイナミズムとグローバル化というモダニティの基本特性を指摘し、絶えざる変化と社会的広がりの中で自己アイデンティティ問題、すなわち制度と個人はどのように関係づけられるのかという問題を把握する。そして現在の社会状況を脱

5) 危険社会という概念についてギデンズが参照しているのは、Ulrich Beck, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp, 1986.

モダニティというよりも高度ないし後期モダニティ、ラディカル化したモダニティと規定し、その3つの制度的特性として時間と空間の分離ないし再組織化（歴史意識、未来の植民地化、グローバル化）、離床メカニズムの拡大（抽象システムの発達）、制度的反省性を挙げる⁶⁾。

これらの制度的条件が現代社会を危険社会化するとギデنزは判定し、次のようにその論拠を示す。危険は基本的には反省性をもたらすものであり、モダニティにおいては、すべてが反省的に懐疑され、問い直される可能性をもつので危険は必然的となる。人々の個人的意味づけ、生活の意味づけが問題化され、反省によって意味が問い直され、それに基づいて人間が選択を行い社会を形成するということに現代社会における構造化特性が見いだされるのであり、逆に、伝統や慣習を信頼していた社会では選択の余地はなかったが、同時にその意味で安全であったわけである。このように選択可能な時代は安全ではない。さらに、モダニティは未来を植民地化するため、ますます危険の計算、危険評価が重要になり、それに加えて危険は高度化することにもなる。グローバルな危険が可能性として存在するようになるのである。大量破壊戦争、生態学的破局、世界経済システムの崩壊、全体主義的強大国の出現などがそれだ。

危険社会に生きる人間の意識やパーソナリティはどうなるのか。ギデنزはそのを自己と名づけ、モダニティの制度的条件の下で形成される自己の基本的ありかたを第2章「自己：存在論的安全と存在不安」で検討する。そして彼は人間が以上のような危険のもたらす不安に対応し、環境、再生産、他者、自分自身といった4つの存在と自己との間に信頼に基づく安全で安定した関係を形成することを目指す、ということを一般的命題として設定する⁷⁾。

6) このモダニティの制度的条件を、ギデنزは1990年代に入って積極的に展開し始めた。詳しくは本論文第2節を参照。

7) 信頼 (trust) 概念はモダニティと自己アイデンティティの関連を問う際のキーワードになっている。自己が存在との間にもつ安定し一貫性ある意味づけを表現している。

このように最初の2つの章でモダニティの制度的条件と、その下で生きる自己のありかたについての一般的枠組が提示され、これを受けて以下の5つの章で自己のありかたが一層詳細に検討されていく。

第3章「自己の軌跡」では、自己反省の目が人生のありかた全体に向けられ、ライフ・スタイルの選択が問われるようになることが述べられる。選択可能性の強化要因としては、反省性と懐疑主義による生活の絶えざる問い直しのほかに、現実が提供する選択肢の多元性やそれに伴う選択志向の強化、生活世界が多元化することに伴う生活経験の多さ、メディアの発達による媒介された経験の優勢⁸⁾、すなわち情報量の多さ、他者との関係、とくに親密関係が純粹関係化し選択可能性を高めることなどが挙げられる。こうしてモダニティにおいて自己の反省的プロジェクトが開始され、自己の意味づけの再検討が行われ、ライフ・スタイルも含めて自己アイデンティティが問い直されるのである。

モダニティにおいて問題化される自己アイデンティティは、過去から予期される未来への軌跡における連続的な自己解剖・自問自答によって形成されるのであり、それを通じて真の自己と自分が考える自己が実現される。ライフ・コースは自己実現が反省的に遂行される軌跡であり、ライフ・コースにおける多様な危険と、危険をもたらす制度的条件が同時に提供してくれる機会のはざままで自己実現が遂行されるというわけである。自己実現、すなわち自己アイデンティティの形成とは、自己と諸存在すなわち自然、未生の人間、他者、自己自身との関係のありかたへの反省的意味づけの全体なのであり、反省的な目はグローバルな世界にも、パーソナルな問題すなわち親密な他者との関係や自分の身体などにも向かうことになる。

第4章「運命、危険、安全」では、自己がそのライフ・コースで多様な危険に遭遇すること、抽象システムとなった専門化された科学・技術がその危

8) 媒介された経験、経験の媒介という概念は、モダニティのグローバル化という制度的条件と自己との相互作用を成立させるものとして重視される。この点については本論文第2節でも述べる。

険に対峙すること⁹⁾、しかしそれは同時に自己の脱技術化であり無能化であること、それゆえ自己は再技術化、パワーの回復を目指すことが述べられる。前述のようにモダニティは多くの危険をもたらすが、ライフ・コースにおいて特に運命的瞬間には再技術化が求められる。運命的瞬間とは深刻な選択が迫られる場合である。しかし人間が自力で行える再技術化は部分的であり、さらに抽象システムを信頼し依存する場合でさえ専門知識の修正可能性や専門家の間での意見不一致、複数の選択肢の提示がありうるため、選択は危険をはらんだものであるほかはない。抽象システムの下で生きる自己は、そのような状況の中で再技術化を志向するのである。

第5章「経験隔離」ではこの抽象システムが自己が存在の意味を問い直す機会となる逸脱や病気や死や性などの諸経験を隔離してしまい、道徳的意味を抑圧してしまうことが述べられる。抽象システムを支える科学技術や専門家によって、存在問題にかかわる道徳的な問いを自己に突きつける経験は隔離される。モダニティは多くの内的準拠システムを発生させるが、社会から隔離される対象となるものもそのひとつだ。犯罪、狂気、病気、死、性、自然などの経験を、それ自体として問題化し隔離し抽象システムの手にはゆだねることは、危険をもたらす経験に対して人々の存在論的安全を保障する意義をもつが、同時に多くの人間からその種の経験の意味を問い直す機会を奪い、道徳的意味の探求を抑圧するのである。モダニティの制度的抑圧とってよい。しかし、道徳性の抑圧は自己の無意味感を強めることになるが、それは逆に意味の回復を目指させることにもなる。なおその際、媒介された経験が促進要因となりうる。

第6章「自己の苦難」では、モダニティの制度的条件の下で生きる自己が、パーソナリティのジレンマに苦しみアイデンティティを確立しようと苦闘せざるをえないことが述べられる。統一化と断片化、無能さと有能性、信頼性

9) ただし抽象システムは科学・技術にかかわる制度のみならず、貨幣などの交換メディア制度も含んでいる。Giddens, op. cit., p. 18.

と不確実性、個性化と商品化といったジレンマである。そしてこれらの背後を流れているのが無意味さの脅威である。自己の意味づけが一貫性と統合性を失い断片化され、多様な問題に対処する際に自己の無能感を味わい、自己の意味づけの確固たる根拠を失い不確実性に苦しみ、商品化の圧倒的な影響力で自己の個性的な意味づけを見失う人々は、自己の無意味さという脅威にさらされるが、だからこそ意味の回復を求める。また無意味さは道徳的問いの抑圧からも生じるのだが、道徳的意味の復活のためには、道徳的問いを争点化する必要がある。そこで、抑圧されたものの回復が目指される。死、狂気、犯罪、性、伝統、宗教、そして新しい社会運動の争点である環境、平和、人権などの多様な問題が問い直されるようになるわけである。

最終章「ライフ・ポリティックスの登場」では、そのような自己が本節の冒頭で述べた存在問題をいかに解決するかをめぐって、すなわち自己が環境や子孫や他者や自分自身などの存在との間に、道徳的な意味が付与された関係をいかに形成するかを争点として、現代社会においてライフ・ポリティックスが登場することが述べられる。自己が存在との関係において自己アイデンティティを再構築し、自己実現をはかろうという運動によって形成されるのがライフ・ポリティックスなのであり、それは解放政治と相互浸透しつつ、現代社会の変動を生み出すことになるのである。

本節ではモダニティと自己アイデンティティについてのギデンズの議論を、ライフ・ポリティックスを中心に置いてそれに収斂するものとして紹介してきたが、次節ではライフ・ポリティックス論を含み込むモダニティ論の全体構成の要点を、ギデンズの社会理論のなかに位置づけることによって確定し、そしてモダニティ論におけるライフ・ポリティックスの中心性を示す。また3節では、ギデンズのライフ・ポリティックス論を筆者の観点から整理し、モダニティ論をさらに発展させるための基盤を準備することにした。

2 ギデنزのモダニティ論の展開と全体像

ライフ・ポリティックスという現代社会の構造変動の基軸をなる争点と運動を鮮明に浮かび上がらせたギデنزのモダニティ論は、彼の社会理論の新しい展開を示すものである。しかも彼の従来の社会理論と一貫性をもって展開されている。すなわち、構造化の視点による体系的なマクロ社会理論の構築である。社会学がモダニティを問うのは当然のことではあるが、それを全体的に問うというマクロ社会学の方向は、専門分化した現代社会学ではむしろ例外的になってきたようだ。しかし、すでに別稿で示したように彼はマクロ社会理論の展開を自己の課題としてきたのである¹⁰⁾。

ギデنزにとってモダニティというテーマはこと新しいものではない。もちろんたんに近代、現代社会というだけではなく、それは社会学に共通の対象である。ここでいうモダニティとは近代、現代社会を全体的に把握するとき成立する概念であり、そういう意味ではマルクス、デュルケム、ヴェーバーの社会理論を総括した最初の単行本『資本主義と近代社会理論』にすでに¹¹⁾、モダンな社会の機造と変動を把握しようという意図が示されていたが、その問い方、答え方がこの20年間に変化し累積されてきた。1973年に刊行された2冊目の単行本『先進社会の階級構造』ではモダニティの構造と変動の分析の焦点は不平等問題であったが¹²⁾、そこからいったんは一般的な社会理論、すなわち構造化理論の構築に移り基礎固めをした上で、その発展として史的唯物論の検討を始め、国民国家という次元をも強調する視点を確立し、マクロ社会理論としての現代社会論を展開し現在に至ったのである¹³⁾。

10) 拙稿「マクロ社会理論の展開の基本方向」『桃山学院大学社会学論集』第22巻第1号。

11) *Capitalism and Modern Social Theory*, Cambridge University Press, 1971. 犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』研究社, 1974年。

12) *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson, 1976. 市川統洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房, 1977年。

13) ギデنزの理論展開の過程については拙稿「ギデنزの構造化理論」『桃山学院大学社会学論集』第26巻第1号の「1. ギデنز社会理論と構造化理論の展開」を参照。

『モダニティと自己アイデンティティ』の1つ前の著作『モダニティの帰結』が¹⁴⁾、ギデンズの新しいモダニティ論のまとまったものとして最初の著作であり、そこには『モダニティと自己アイデンティティ』の内容が先取りされ、ほぼ論点は出揃っていた。しかし、モダニティの制度的特性の議論が主眼とされ、自己やパーソナリティやアイデンティティには言及されてはいなかったものの、4つの制度次元を基盤にした議論が中心であった。4つの制度的次元とは、1985年の著作『国民国家と暴力』で示された資本主義、産業主義、国家の監視、国家の暴力である¹⁵⁾。この4つの次元もモダニティの帰結を示すのだが、『モダニティの帰結』ではそれを基盤にしたさらなる帰結の諸相が整理されているのである。『国民国家と暴力』の到達点である4つの次元の把握こそ、彼に次の段階への理論展開を促す契機となった。4次元図式に基づき現代社会をとらえ直してみると、そこからはみ出す多くの問題が鮮明になり、次にそれらの検討が課題となったと思われる。

『モダニティの帰結』において4次元図式に基づくモダニティ分析が展開されたのだが、実はその中にライフ・ポリティックスも位置づけられていた。しかし、そこではその所在が指摘されるにとどまり『モダニティと自己アイデンティティ』のような議論は展開されていなかった。それではその概要を紹介し、そこにおけるライフ・ポリティックスの位置づけについて『モダニティと自己アイデンティティ』との差異を明らかにしよう。そのためにここで示されたモダニティにかかわる問題を4次元で一貫性をもって彼が提示した図式について説明しておこう。

4つの制度的次元に対応して、グローバリズムは次のように成立する¹⁶⁾。資本主義は世界資本主義システム、産業主義は国際分業システム、監視は国民国家システム、暴力は世界軍事秩序となる。もとなる4次元が国民国家におけるものであるから、それらはグローバル化すると当然ながら、それぞ

14) *The Consequences of Modernity*, Polity Press, 1990.

15) *Nation-State and Violence*, Polity Press, 1985.

16) *The Consequences of Modernity*, pp. 70-8.

れの世界システムを形成することになる。ギデンズにとって高度モダニティの基本的特性はグローバル化なのであり、それは時間と空間の分離、時間と空間の再組織化、抽象システムの確立（システムがローカルからグローバルへ離床）をもたらすのである。

高度モダニティにおいて、社会変動を主導する政治思想はユートピア的リアリズムとよばれるものが主流となる¹⁷⁾。それが向かう政治は、地域政治、不平等政治すなわち解放ポリティックス、自己実現政治すなわちライフ・ポリティックス、グローバル政治となる。ユートピア的リアリズムは高度モダニティの政治思想である。地域、すなわち生活圏の問題も、不平等問題も残るが、同時にグローバルな視野をもたねばならなくなり、自己の意味づけを求めての政治も重要となる。ただし、この4つは必ずしも資本主義、産業主義、監視、暴力に対応していないようだ。もし対応さすなら資本主義と産業主義は逆になっているのではないかとも思われる。一方では不平等政治、階級的不平等、資本主義、他方では地域政治、環境問題、産業主義という系列が成立するからだ。また暴力をグローバルに限定するのも無理がある。しかし、ギデンズはこの対応を選好しており、前節で紹介したライフ・ポリティックスの原点の整理においても、グローバル・システムで問われる争点として暴力行使や、核戦争などの大規模戦争をあげている。

政治思想に基づく社会運動は以上に対応して、資本主義の次元では労働運動、産業主義の次元ではエコロジー運動、監視の次元では自由化と民主化の運動、暴力の次元では平和運動である¹⁸⁾。これは『国民国家と暴力』でも提示されていた図式である。ここから判断しても前段落で述べたユートピア的リアリズムの次元は産業主義と資本主義は逆になっていると思われるが、それほど対応性にこだわらずに、これだけ取り出してみれば妥当なものといえよう。ただし、ライフ・ポリティックス、自己実現の政治と自由化、民主化

17) Ibid., pp. 154-8.

18) Ibid., pp. 158-63.

運動が対応していることは確かだ。

後述のようにギデンズはポストモダン思想に対してきわめて批判的であるが、ポストモダンの趨勢と述べるときにはモダンの社会変動の方向性を意味している。すなわち、資本主義の次元ではポスト欠乏システム、産業主義の次元では技術の人間化、監視の次元では多層的民主主義参加、暴力の次元では非軍事化である¹⁹⁾。これらは後述のモダニティの高度な危険を克服する方向でもあるが、これについては、国民国家レベルと世界システムレベルの双方について考えねばならない。

さて、この中のポスト欠乏システム、すなわち世界資本主義システム以後の世界経済システムとは、社会化された経済組織、地球ケア、調整されたグローバル秩序、戦争克服であり、これらは資本主義、産業主義、国際関係、国家暴力のはらむ問題の解決の方向である²⁰⁾。平和が帰結されるように、そしてまた地球的視野での環境問題への対応が可能になるように、生産・流通・消費のシステムが世界的規模で社会化され調整されて運営される。

しかしそれとは全く逆の帰結がもたられる可能性もある。高度モダニティに特有の高度な危険すなわち経済破局、環境破局、全体主義権力、核戦争などの大規模戦争である²¹⁾。これらの高度な危険こそグローバル化がもたらしたものにほかならず、『モダニティと自己アイデンティティ』でも自己の安全をおびやかす最大要因とされているのである。

見られるように、ライフ・ポリティックスはユートピア的リアリズムの図式において登場する²²⁾。それは自己実現をめぐる政治とされ、解放ポリティックスと対照されている。自己実現とは意味づけを求める政治であり、解放以後の政治、～への自由の政治であり、自己アイデンティティやパーソナルな倫理にかかわる。それは解放政治の課題を一応クリアした先進社会のみなら

19) Ibid., pp. 163-4.

20) Ibid., pp. 166-9.

21) Ibid., pp. 170-3.

22) Ibid., pp. 156-7.

ず、不平等問題が大幅に残存する社会にも登場する。なお、ライフ・ポリティックスにおいてはグローバルの両義性が重要である。グローバル化は高度な危険をもたらすが、同時に問題解決の手段としても必要であるからである。

また、この『モダニティの帰結』では時間と空間の分離、離床システム、反省性というモダニティの3つの制度的特性がすでに述べられていた。それらはこれらの4つの次元におけるモダニティの進展とともに形成されたのであり、その視点は『モダニティと自己アイデンティティ』でも継承されている。かといって『モダニティの帰結』が制度論に終始して居るわけではない。構造化理論というギデنزの基本的視点から当然のことながら、行為論ないし主体論との関連づけもなされていた。『モダニティと自己アイデンティティ』のキーワードになっている信頼や安全と危険が、制度的条件の下で生きる人間の側から見た状態を端的に示す概念として採用されていた²³⁾。信頼の対象は前近代では、親族関係、地域共同体、宗教的コスモロジー、伝統であるが、それに対して近代では、個人的な関係、抽象システム、未来である。危険の源泉は前近代では自然、収奪や略奪などの暴力、宗教的な力であり、モダンでは反省性、戦争の産業化からの暴力、個人的無意味さの脅威である。以上のように『モダニティと自己アイデンティティ』の要点はほとんどそこで簡潔に提示されていたのであった。

それでは、両者の相違は何か。1節で紹介したように『モダニティと自己アイデンティティ』では、ライフ・ポリティックスが存在問題との関連で体系づけられ、その背景にある主体としての人間の特性が詳細に述べられている。ライフスタイルの選択、身体への反省性、経験隔離、パーソナリティのジレンマ、道徳的問いの抑圧などである。1985年の『国民国家と暴力』が1981年の『史的唯物論の現代的批判』をより詳細に述べ再構成し²⁴⁾、新たな視野を開こうとしたものであったと同じように、『モダニティと自己アイデ

23) Ibid., p. 102.

24) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press, 1981.

ンティティ』は『モダニティの帰結』の到達点を総括した上で、現代社会の変動を担う主体の運動を基軸にして体系化し、内容の豊富化を企図したものだといえよう。

次に、ギデンズのモダニティ論と構造化理論との関連性を見てみよう。彼は著作を発表するごとに構造化理論との関連性を問われる。一般的社会理論としての構造化理論がそこにどう生かされているかを問題にされるのである。たしかに用語の面だけを見ると、構造化理論の概念がそのまま使われていないので関連がないように見える。しかし、構造化理論は社会認識の基礎的な視点を提供する基礎的存在論なのであって、その視点はまさに一貫していることが注目されるべきなのである²⁵⁾。

第1に、主体が構造に制約されつつもそれを形成するという点、主体が反省によって意味をとらえ直すことによって構造を変化させる可能性をもつ点の重視がある。『モダニティと自己アイデンティティ』は単純に言えば、それまでの構造次元の制度的分析から、焦点を行為や行為主体に移動させたということになるが、彼が常に構造と行為を関連づけながら社会学的分析を遂行してきたこと、今回もそれが踏襲されていることは明らかである。

構造化理論との関連は、第2にパワーの中心性である。ライフ・ポリティックスの特性の1つを生成的パワーとギデンズは規定する。その根源は反省能力であろう。反省的意味づけによって変動目標が設定され、それを達成するための行為の手段となる資源は解放政治の結果準備された。選択可能性とは、人間の認知可能性と行為可能性であり、それこそパワーなのであり、構造化理論の中心に位置するのである。また、同じくパワーに関連して、マクロ社会理論の展開の方向を示していた運動概念の重視にも連続性を見いだしうる²⁶⁾。ライフ・ポリティックスは生のありかたをめぐるコンフリクトであり、それを構成する行為は運動にはかならない。

25) この点については註13の拙稿で論じた。

26) ギデンズが運動概念を重視するようになったのは、*Constitution of Society*, Polity Press, 1984からである。

第3に、別稿で指摘したように、マクロ社会理論の展開の方向を示す構造の多元性への着目である²⁷⁾。マクロとミクロの接合の課題に応えるものといってもよい。生き方というミクロな課題がマクロな制度的条件との関連で把握される際に、構造的条件と行為・相互行為の相互作用という構造化の特性が、グローバルな場とローカルな場の構造間の相互作用として現われているのみならず、ローカルな場の構造における主体の理論にも現われている。第1節の紹介ではあまり触れられていない親密関係への着目²⁸⁾、パーソナリティ特性への着目がそれに該当する。

第4に、『社会理論の中心問題』で導入されて以来、構造化理論の主要概念の1つとして多用されてきた時間・空間の概念が、モダニティの制度的特性の1つである時間と空間の分離という点で継承され確定されている²⁹⁾。それは時間・空間の遠隔化、グローバル化を内包する概念なのである。

以上のようにギデنز自身の理論展開にはモダニティ論の内容的側面においても、構造化理論という一般理論的側面においても内的な連続性があるのだが、最後に簡単に外的な関係について触れておこう。彼の理論展開は、欧米のグランドセオリーの流れを背景に遂行されてきた³⁰⁾。社会変動の中に人間のパーソナリティを問うという形式の現代社会論は伝統的なものであるが、彼もまた、モダニティの制度的条件に対応したパーソナリティの動向、それに由来する変動形成力を問うているのである。たしかに折衷的な手法でおどろくほど多くの論者の著作から材料を動員しているので、そのオリジナリティに疑問を呈する向きもないわけではない³¹⁾。しかし、ライフ・ポリティッ

27) 註10の拙稿。

28) ギデنزの1992年中に刊行予定の新著は親密関係がテーマになっている。

29) ギデنزが時間・空間概念を重視するようになったのは、*Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press, 1979. 友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』ハーベスト社、1989年。

30) Quentin Skinner, ed., *The Return of Grand Theory in the Human Sciences*, Cambridge University Press, 1985. 加藤ほか訳『グランドセオリーの復権』産業図書、1988年。

31) たとえば *Modernity and Self-Identity* に対する B. S. Turner の書評。Brit-

クスとその背景を、方法論的自覚のもとに体系的に構成したところに、ギデنزの独自性は遺憾なく発揮されているのである。方法論的自覚とは複雑な現実のありかたの中に先端的な現象を見出し、それを理念的、一面的にまとめあげて示すことの自覚である³²⁾。それまでの蓄積を踏まえ生かしつつ、新たな問題状況を切り開いたと高く評価できるだろう。

なお、ギデنزがモダニティ論をそれ自体として正面に出して展開するようになった背景には、現代社会理論に底流する現代思想の先端であるポストモダン思想への対応という側面もある。『モダニティの帰結』でもそれは明示されているが、彼はポストモダン思想が人間のパワーを軽視し、安直なニヒリズムにおちいつたり、ハイテクノロジーや高度情報化を一面的に強調したり、マルクス主義を払拭しきれなかつたりすることに対して批判的なのである³³⁾。一面的な議論を彼は採用しない。折衷的と非難されることもあるが、広い視野で諸要因を取り上げ、それらの間のバランスを重視する。構造的条件と主体的なパワーとの両方を重視し、たとえばグローバル化が一面的に人間を追い詰めているとは判定せず、グローバル化によって人間がパワーを獲得している側面も指摘するのである。こういった姿勢は彼の社会理論に一貫して見いだせよう。

3 ライフ・ポリティックス論の発展に向けて

ライフ・ポリティックスは新しい社会理論の展開のキーワードになりうる可能性をもっている。それはまさに高度モダニティである現代に対応している。また、江原由美子が述べるとおり³⁴⁾、「生と生活の政治学」は新しい社会理論の展開に対応しているとも言える。しかも、ギデنزが実例を示しているように、この概念によって現代的な問題群を統一的に把握し、その解決

ish Journal of Sociology, Vol. 43, No. 1.

32) *Modernity and Self-Identity*, p. 2.

33) *The Consequences of Modernity*, p. 150.

34) 江原由美子「書評に答えて」『ソシオロジ』第37巻第1号。

方向を探ることができるのである。

ライフ・ポリティックスはギデンズのオリジナルな概念と言ってよいと思われるが、その類似概念がないわけではない。代表的なものにライブリー・ポリティックスがある。それは現在あまり多用されているとは言えないが、日本では1980年代初めに政治学者の篠原一が提示した³⁵⁾。それは社会学で新しい社会運動論が提唱された時期と重なっていたのだが、両者とも争点の内容も、運動主体の意識についての議論も類似していた。すなわち、争点ないし問題化の視点として両者とも、公害などによる環境破壊、公害・薬害による健康破壊、消費問題、女性差別などさまざまな差別・人権問題、原子力発電・核兵器問題などを重視していた。それらは生命にかかわる争点であり、問題解決のためには生活の見直しにまで波及するものであった。そして運動の担い手は生き生きとした意識で、押し付けのイデオロギーによらず、他人のためだけでなく自己実現のために、まさにライブリーに活動するところに特色が見いだされたのである。

運動論の展開の歴史を見ると、階級論から多元論への推移が見いだされる。争点についても、主体についても、主体の意識についてもそうである。そのようななかで新しい社会運動が言われるようになったのであり³⁶⁾、それは解放の政治学からライフ・ポリティックスへの推移に対応している。マルクス主義が主導した運動の時代は長く続いてきたが、60年代末から70年代初めに大きな転換期を迎え、70年代から80年代にかけてライフ・ポリティックスが勢いを増し、社会主義社会の崩壊が明白となった90年代の始まりと共にその趨勢は決定的となったといえよう。

第2節で述べたように、ギデンズも新しい社会運動とライフ・ポリティックスとのつながりを、自己実現の政治という形式に見る。しかし、そこにと

35) 篠原一『ポスト産業社会の政治』東京大学出版会、1982年、49-50頁、58頁。なお、彼はこの概念をアメリカの政治学者S. Berger から借用したと述べている。

36) 「新しい社会運動」については社会運動論研究会編『社会運動論の統合をめざして』成文堂、1990年、所収の諸論文に詳しい。

どまらない。その背景にあるモダニティの制度分析，その下での自己のありかたの分析，存在問題と関連づけた争点の内容がそれを示している。しかし，無理に相違を強調することはないだろう。ライフ・ポリティックス論がそのような理論状況に対応して登場したこと，そしてそれらを一層発展させるものであることを確認しておけばよい。その上でギデنزの議論を一層発展させる方向を探ることが必要なのである。

まず，第1節で紹介したギデنزのライフ・ポリティックスの争点の分類の問題点を指摘し，その修正案を明示しよう。第1に，存在という領域，生存という問題，自然という内的準拠システムの系列であるが，これは結局のところ人間にとっての環境問題を示している。とすれば環境が自然に限定される必要はない。たしかに自然は存在の基底にあるのだが，しかし彼も別の文脈で指摘しているように，創造された環境，すなわち人工的環境もそれ自体として確固たる存在をなしている³⁷⁾。自然環境の上に人類は人工的環境を重ね合わせてきたのであり，とくに近代・現代においてはそれが自然環境を急速に変容させつつあるのは周知の事実だ。だからこそ自然環境が重要な存在問題となって登場してきたのだが，しかし同時に人工的環境もまた自律的存在として認知されるべきなのであり，どのような人工的環境を選択するかが問われることになるのである。

第2に，有限性という領域，超域という問題，再生産という内的準拠システムの系列であるが，これは独自の存在問題というより他者の系列に位置づけられるべき問題ではないか。種の再生産は重要な存在問題ではあるが，自然や他者や自己とは同じ次元にはないようだ。再生産は一般的な意味では人間存在だけの問題ではない。もちろんここでは再生産は妊娠から子の出産に至る過程を意味しているのではあるが，それを他の存在問題と並列することはできないと思われる。これは卵と精子，受精卵，胎児以前，胎児という一連の存在として，他者の中に位置づけられるべきではないだろうか。

37) *Modernity and Self-Identity*, pp. 165-6.

第3に、その他者の問題である。ギデンズはこれを個人性と共同性という領域、協同という問題と把握しており、それはその限りで正しいのだが、それを一挙にグローバルな世界システムにまで拡大してしまっている。もちろんそれもグローバルな他者としてモダニティにおいて大きな位置を占めるが、他者はそれだけではないのは明らかである。まず彼の概念を使えば、グローバルな他者の問題と、ローカルな他者の問題があるというべきなのである。そうすれば、彼も重視している親密関係の問題も存在問題として正しく位置づけることが可能となる。さらに上述の胎児とそれに関連する存在が他者に加えられるが、それだけではない。後述のある種の動物もまた他者とみなされるべきなのである。

第4に、ギデンズは科学・技術の進歩に制限を加えるべきかという争点を、個人性と共同性という領域、協同という問題、グローバル・システムという内的準拠システムの系列に置くが、その根拠は不明確である。ライフ・ポリティックスのすべての争点の背景には科学・技術があるからだ。唯一の原因ではないにしても、科学・技術の発達が人間の選択可能性を飛躍的に拡張したからである。自然環境も、動物も、人間の出産や身体も、世界平和も、世界経済も、それによってありかたの多様性を顕在化された。可能な選択肢があれば選択に迷わざるをえない。そして後で触れることになるが、これらの問題を解決するのも科学・技術の発達に大きく依存しているのである。

第5に、自己アイデンティティ問題だが、これは『モダニティと自己アイデンティティ』というタイトルからも明らかに、ギデンズが中心問題に設定しているものだ。とすれば、ライフ・ポリティックスの争点の中で、これのみが自己のライフ・スタイルの選択にかかわる問題なのだろうか。もちろん、そうではない。無用の誤解をさけるためには、存在問題としては自己アイデンティティは自己とのみ表現しておくべきではないだろうか。あるいは狭義の自己アイデンティティ問題としておくべきではないか。そう限定して初めてギデンズが実質的に遂行しているように、身体への意味づけや性的な意味

づけなどの自分自身への意味づけの問題を把握できると思われる。このように自己アイデンティティを自己内部に閉じ込めずに解放するならば、意味づけの位置を正しく把握しうるのである。自己アイデンティティは、現実世界の中で生きる自分自身へのある程度の一貫性と安定性をもつ意味づけの全体的まとまりであり、したがってそれは自己に限定されず、自己と関係する自然、他者、動物、再生産、身体といった存在にまで及ぶのである。

第6に、動物の権利問題をギデنزが自己アイデンティティの系列に属させているが、彼はなぜ動物の権利を自己アイデンティティという領域、個性という問題、自己と身体という内的準拠システムの系列の道徳的争点に入れているのであろうか。その根拠は明らかでない。常識的には動物の権利は何よりも自然の問題に属するのではないかと思われる。もちろん人間に接触することのないある種の野性動物の場合である。しかし、野性動物でも人間の生活に密接な関係に置かれるものも多く、また食糧や労働力となる動物、実験動物、ペットとなる動物、その他人間に身近な動物も存在する。それらは一見奇妙なようだが、他者の中に位置づけておくのが適切と思える。したがって動物の問題は、自然に属するものと他者に属するものとに区分されることになる。動物の生命、生活の質の問題が争点化しているのは事実であり、そこには自然環境の中に含まれている人間社会と直接接触しない動物の問題、野性動物の保護問題、種の保存問題などから、人間の日常的な生活に取り込まれている動物への対処の問題、すなわち家畜や実験動物や野良猫・野良犬などの処置の問題に至るまでの問題群が見出されるのである³⁸⁾。

要するに、存在問題は基本的には環境、他者、自己の3領域に区分される。そしてそれぞれの下位区分として、環境は自然環境と人工環境を、他者はグローバルな他者、ローカルな他者、胎児、動物の4つを、自己は身体も含めて自分自身への意味づけ問題と、資源としての身体の問題を含む。なお、自

38) 動物の権利の問題は社会的にかなり顕在化してきており、議論も深められつつある。たとえば Peter Singer, ed., *In Defence of Animals*, Basil Blackwell, 1985. 戸田清訳『動物の権利』技術と人間, 1986年。

分自身への意味づけ問題には、ギデنزが指摘している性的アイデンティティのみならず、年齢その他の地位・役割に対応するアイデンティティ問題や、自己の種々の経験への意味づけ問題が属し、資源としての身体問題には、臓器移植や遺伝子加工などの道徳的意味を問う問題が属する。

以上において、ギデنزの提起したライフ・ポリティックスの争点分類を踏まえながら、存在問題のカテゴリーの全体像についての修正案を提示したのであるが、最後にライフ・ポリティックス登場の原因と、その展開の方向についていくつかの論点を提示しておきたい。

原因については第1節で紹介したように、モダニティの制度的条件と、それに作用されて形成される自己のありかたがギデنزによって分析されていた。制度的条件は第2節で明らかにしたように、彼が80年代の著作を通じて発展させてきたモダニティの制度の4次元と、主として90年代に入って使い始めた3つの条件によって構成されている。それらが危険社会化を推進しつつ、自己に対しては選択可能性を高め、存在問題をめぐって生きる意味への希求力を高める状況を準備するというわけである。しかし、これらの制度的条件と自己のありかたが、それぞれの存在問題にどれがどのように対応するかは、検討課題として残されている。

原因論で次に重要なのは、特に基盤となるものを指摘しうることである。それは科学・技術と反省性である。科学・技術については上述の通り、すべての存在問題の背景に大きな位置をしめている。それは主として抽象システムという制度を支えており、危険を生み出しもすれば、選択可能性を高めたり安全確保の手段となったりもする両義性をもっているのである。反省性については、反省的意味づけと言い換えることができるが、意味づけは人間の基本的条件であり、とくにモダニティ特有のことではないと思われるかもしれない。しかし、反省性が昂進するのはモダニティに生きる人間に特有なのである。意味づけは安定することなく、すべてが疑われ意味を問い直される。新しい意味づけが絶えず追求される。これこそモダニティの本質的特性とい

うべきなのである。それは社会や文化のありかたに絶えざる変容をもたらした文明の進歩に貢献するが、他方では、安定しない意味づけは存在への信頼を揺るがせ不安をかきたてる。そこで人々はかえって安定した意味を希求することになるが、反省性を止どめることはできないのである。

それではライフ・ポリティックスは今後どう展開していくのだろうか。反省的な意味づけ能力は存在問題を争点化するが、意味の喪失は存在問題それ自体でもある。意味の喪失が意味を希求させ存在問題を顕在化するのはもちろんだが、それは自己の存在基盤を揺るがす。これこそ存在問題の原点である。自己アイデンティティはギデنزの言うように存在問題の1つのカテゴリーであるが、上述のように同時にすべての存在問題の背景にある条件でもある。意味の喪失は人々に意味を希求させる。それは現代人の日常生活に多様な現象を生み出し潜在的なライフ・ポリティックスを展開させ、自己実現の政治としてのライフ・ポリティックスが顕在化する基盤となる。

意味づけが平凡な日常生活において充足されることは可能だ。勉強や仕事、子供の教育、演劇やスポーツなどへの熱中もあれば、組織への帰属や親しい仲間との親密な関係の中で安定感を得ることなどもありうる。しかし、意味への希求が宗教や賭け事への熱中や伝統への回帰や社会運動への参加などに向かったり、犯罪、狂気、拒食症、異常性愛などの逸脱に向かう場合も多い。逸脱の場合は望ましい方向とは言えないが、意味の希求が過剰になったり、ラディカル化したりすることはすべての存在問題について生じうる事態なのである。

意味の喪失に対応してラディカルな立場や思想が現れる可能性は、ライフ・ポリティックスが反近代化の方向に展開しモダニティの成果を破壊する危険性や、過剰な権利の主張によって社会生活な安全・安定が脅かされる危険性などをも含む。反近代化には宗教的復古主義、反科学・反技術主義、絶対的自然保護・環境主義、民族中心主義ないし地域閉鎖主義などがある。過剰な権利の主張には、すべての動物を殺すな、動物実験を一切禁止せよ、と

いう動物保護・動物愛護の立場、妊娠中絶の絶対的反対の立場、逸脱を正当化し統制から解放しようとする立場なども含まれる。しかし、常に両義的に考察するギデنزの認識態度を採用するならば、高度モダニティの制度的前提を廃棄することはできないし、すべきでもない。それを前提条件として、逆にそれを手段として活用し、適切な問題解決の方途を探るべきなのである。

おわりに

この論文ではギデنزの提唱するライフ・ポリティックスをキーワードに、現代社会の1つの側面を浮き彫りにすることを試みた。まず、ギデنزの近著『モダニティと自己アイデンティティ』の内容を、ライフ・ポリティックスを基軸に再構成することによってその概要を明示し、次に、彼のこの20年間の社会理論の展開のなかにモダニティ論を位置づけ、ライフ・ポリティックスの中心性を確認した。制度とパーソナリティを関連づけて現代社会論を構築するひとつの範型がそこに求められよう。

ギデنزの議論は内容豊かであり、そこからさらなる展開可能性を引き出すことができる。3節で示したのはそれであった。現代人はますますライフ・ポリティックスに巻き込まれていくであろう。もちろん解放政治の課題も残されているが、それと同時に、またそれと相互浸透的に、現代世界でどう生きるかという生き方の問題がさらに争点化すると思われる。ここで開示されたライフ・ポリティックスの問題圏は、今後の社会理論、社会学的分析の発展においてますます重要になると予想される。個々の争点についてのさらに立ち入った分析が、その原因についても解決の方向についても要請されることになるろう。

The Age of Life Politics: On Giddens' Theory of Modernity

Kouji Miyamoto

Anthony Giddens, who is a modern British sociologist, has written many books, and his latest books are *The Consequences of Modernity* (1990) and *Modernity and Self-Identity* (1991). This paper aims to introduce the contours of Giddens' theory of modernity, show its theoretical significance, and probe in the possibilities of revising and developing it.

First, the theoretical construction of his theory of modernity is depicted as explaining the connections between life politics and its background.

Second, the theoretical significance of his theory of modernity and the centrality of life politics in it are showed while referring to his works for these 20 years and structuration theory which is his basic ontology.

Third, the classification of existential questions, which are issues in life politics, are examined and revised. Some problems in directions of life politics are discussed, too.